

最近出会ったお奨めの本

三島総合病院 平賀聖悟

もう今年の誕生月が来てしまった。昨年で三島にお世話になって20年が経ち、丁度喜寿の年齢に達したなあーと実感していたところ瞬く間に1年が通り過ぎようとしています。

懐古趣味は年齢をとった証拠等と言われていますが、温故知新という格言もあるように、歴史を知ることには前向き、時には重要な意味が込められていると思われまます。

昨年12月に講談社から出版された「開成をつくった男、佐野鼎」（柳原三佳 著）を大変興味深くまた感銘をもって読みました。母校である開成（創立時は共立学校、きょうりゅうと読んでいます）の創立者というのみでなく、佐野鼎の生誕地が静岡県東部すなわち富士市水戸島（現水戸島元町）と知り、これまでこの人物に関する知識は全くといって良いくらい無かったのですが、平成9年に三島へ着任して間もなく、東京では開成と並び称される麻布学園の創立者が同じ静岡県東部の沼津市出身の江原素六翁と知り益々興味を惹かれました。中学時代から剣道部に在籍しておりましたが、麻布とは対校試合で行き来し、県医師会でお世話になった杉谷正東先生や青木一雄先生は麻布のご出身であり、また私の甥が麻布中学へ入学したこともあって親近感を持っておりました。

ところが5年程前に富士市で富陽軒を経営している後輩の石井大介君から佐野鼎のことを聞き、驚愕と共に一般にもあまり知られていない佐野鼎について研究してみようという気持が湧き上がりました。時同じくして東京の母校の方にも佐野鼎研究会が発足したので、静岡県東部の同窓と共に研究会に参加して知識を広げることが出来ましたし、平成29年には富士市において地元の郷土史家の先生方のご協力のもと佐野鼎研究会 in 富士という形で研究会を開催することも出来ました。

長々と佐野鼎研究会のことを書きましたが、本

書の著者の柳原さんは佐野家のご親族であって、佐野鼎の直系ではありませんが、ジャーナリスト兼ノンフィクション作家であり、以前から佐野鼎に関心をお持ちであると共に、佐野鼎研究会には設立時から熱心に参加されており、いはばこれまでの研究を集大成した形で今回の単行本にまとめられた訳であります。

調べてみますと、これまでも佐野鼎関連の資料は沢山ありますが、全体像をまとめたものとして2001年に発刊された「佐野鼎と共立学校」（松本英治執筆、非売品）や2010年雑誌ニュートンに掲載された「共立学校・開成学園創立者佐野鼎」（水谷仁）等は優れたものですが、今回のノンフィクション小説風に書かれた佐野鼎伝は初めての作品であり、生の史料のみからでは伝わり難い時代背景や人物像が生き活きと描かれており、優れた著書に仕上がっていると思いました。

時は明治維新の8年前、万延元年（1860年）に日米修好通商条約の批准書交換のために、徳川幕府の正式な遣米使節として米国から派遣された黒船の1つポーハタン号に乗って、ハワイ経由サンフランシスコに着いてから更にワシントンまで行き、ホワイトハウスで第15代大統領ジェームズ・ブキャナンに会って目的を果たしました。正使新見豊前守正興、副使村垣淡路守範正、監察は歴史的にも有名な小栗豊後守忠順を中心に諸大名の元から77名の団員が組織されていました。加賀藩士として召し抱えられていた佐野鼎は、代表団のひとりに焼津出身の益頭駿^{ましず}二郎尚俊が勘定組頭支配普請役に選ばれたことから、その従者として一行に加えられ、初めて米国を体験する機会を得たのでした。航海中に英語をマスターし、ワシントンのあとはニューヨークから大西洋を横断し、アフリカの喜望峰を回ってジャカルタ、香港を経て10ヶ月ぶりに横浜へ帰港しました。佐野は「奉使米行航海日記」という詳細な記録を残し加賀の前田侯へ提出したのです。鎖国が続いていた江戸末期の日本人が、文化段階の全く異なる米国に触れて新鮮な驚きとカルチャーショックを受けたであろうことは、想像に難くありませんが、本書を読む

と江戸末期の日本人の生活様式や環境と全く状況の異なる米国社会との比較がありありと浮かび上ってくる感がしますし、優れた歴史書と言っても過言ではないと思われます。

因みに、ポーハタン号の5日前に咸臨丸が遣米使節団の随行艦として浦賀を出発、軍艦奉行木村摂津守と艦長勝海舟を中心に約90名の乗組員で組織され、サンフランシスコに到着後は1ヶ月程滞在してから日本へ戻りました。福沢諭吉やジョン万次郎が有名ですが、ポーハタン号の1年後の文久元年（1862年）12月にはイギリスの軍艦オーデイン号で安政5ヶ国条約に基づく開港・開市の延期を交渉するためオランダ、ロシア、イギリス、フランス等への遣欧使節が派遣されました。そして奇しくもこの使節団に翻訳方として福沢諭吉が、

船中^{なか}賄方兼小使として佐野鼎も同乗しています。

明治六大教育家として大木喬任、森有禮、近藤真琴、中村正直、新島襄、福沢諭吉といった人達が知られていますが、江戸時代から文明開化を迎えたわが国にとって最も必要なものは何かということをもって体験し、日本の将来に対して真剣に思いを注いだ有識者は、やはり教育が最重要であると認識し塾や学校の設立に人生をかけたものであることがひしひしと伝わります。六大教育家以外にも江原素六や佐野鼎といった教育を基礎に現在の日本を築いてくれた先見の明ある人材を育ててくれた静岡県東部の土壤に敬意を表すると共に、この地で働けることに誇りを感じるものがあります。

会報「編集後記」の一部抜粋

平賀先生からは先生の母校、日本の超名門開成高校の成り立ちを書いた本「開成を作った男、佐野鼎」について紹介していただきました。まだ本は読んでおりませんが平賀先生の文章を読んでいるとその躍動感が伝わってきます。短い紹介文の中に秘めた冒険談は、この本を読みたいと思う以上にさあ会員諸君、冒険に出ようじゃないか、と思わせる文章でした。

